

浜風会/入会募集中  
毎月第1,3木曜日

# しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会/浜風会会報 No.18

## 篠原はお寺が多い

「篠原にはどうしてお寺が多いの?」

これは昨年の夏、歴史に熱心な六年生の女の子から、質問を受けた時の話である。確かに西神明神社横の興福寺から、東へ長福寺、宝林寺と三寺並んでいる上、更に東へ篠原寺と篠原西に四寺、篠原東へ入って、玉蔵寺、保泉寺、萬松院の三寺、坪井町に光雲寺と東光寺の二寺そして馬郡町に如意寺、東本徳寺と西本徳寺の三寺の篠原地区に合計十二のお寺がある。(『篠原村誌続編』参照)

一体これは多いのだろうか。  
近隣地区と比較しても確かに多い  
そこで近隣の他地区と比較してみると

明らかに篠原地区にお寺が多いことがわかる。(下表) 舞阪地区が極端に少ないのは、面積や、海岸に近い不安要素からであろうか。篠原地区のお寺が全て県道北に位置していることからもうかがえるが、海岸筋の新津

近隣地区の寺の数と寺の世帯比率と面積比率

地区	寺の数	世帯数 22/9月	1寺当り 世帯数	1寺当り 面積 km <sup>2</sup>
篠原	12	15,667	456	0.86
舞阪	2	12,267	2,228	2.32
雄踏	9	15,457	576	0.91
可美	7	15,331	906	0.59
入野	9	23,802	1,005	0.93
新津	8	14,365	675	1.21

『昭和40年静岡県仏教会名鑑』、浜松市データより

地区が意外に多いこと、一方可美地区が面積比で一番多いこと等も注目される。

しかし実際にはいずれのお寺も江戸時代以前に建てられていることから、現在の世帯数の単純な比較では篠原にお寺の多い要因までは読み取れない。

### 篠原は当時より人口が多かった

篠原地区はお寺の多いこと、他、臨濟宗、曹洞宗、日蓮宗と三つの宗派があるのも、他地区にないところである。(今回説明は割愛する)

それでは何故篠原地区にお寺が多いのか。下表は明治二十六年のデータ(『浜風と街道』より)であるが、一つのお寺

明治26年当時の世帯数・比率

村	寺数	世帯	比率
篠原	8	470	59
坪井	2	140	70
馬郡	3	200	67
合計	*13	810	62

\*昭和に入ってから一寺併合した

る篠原西に四つの寺が並ぶ様は、舟の交通が盛んで、河岸から東へ八阪神社付近までの往時が偲ばれる。多くの家が曲がりくねった狭い道路を挟んで立ち並ぶ様子から、この地域が早くから発展して、人口が多かったとみることが出来る。それが篠原にお寺の多い理由ではなからうか。

### 廃仏毀釈の影響が少なかった

時代以前からもお寺は現在の役所のような働きをしていたと言われている。想像するに街道筋故の世帯数が増えるにつれ、多宗派にわたって、地区は他地域と比較して、この影響が少なかったこともお寺の多い理由と言えるだろう。

**平成22年度主な活動**

- ★ 山下孝先生講座
  - ① 平城遷都 1300年 奈良の文化を築いた人々
  - ② インドの石窟寺院
- ★ 本年のテーマ
  - 昭和時代の地域歴史を掘り起こす
  - 「ふるさと資料室」改修
- ★ 主な自由研究
  - ・七兵衛家文書より
  - ・篠原地区の年表新規完成
  - ・篠原地区の狛犬
  - ・浜松地方の国学
  - ・「寂室和尚語録」より
- ★ バス旅行/小旅行
  - ① 尾張・美濃を訪ねる等
  - ② 地域偉人の館を訪ねる

# 城ノ内のこと

新居関所は、慶長五年（一六〇〇）家康が関ヶ原の戦いに際し、敵軍の侵入や味方の裏切り寝返り防止、残党の取締りを行うために設置したといわれる。廃止されたのは明治二年である。その間の一時期、関所役人の与力同心が篠原村の「城ノ内」という場所に家族と住んでいて、関所まで毎日舟で通ったこと。その内の三人の子孫が、今も篠原町に住んでおられることなどが、大正二年発行の『篠原村誌』に載っているので紹介する。

## 城ノ内のじや

元禄以前、志都呂村の陣屋に三宅半七と言へる役人ありき。当時荒井の関所は此役人の治下にありしが故に、関所の役人は全て篠原村地内城ノ内に居宅を構え妻子を養ひおき、事ある時は妻子を質とすべき用意なりき。関所役人は毎日舟にて荒井御関所へ詰め居たり。此地今は畑となりぬれど、境界線一直線をなして見ゆるも心地よし。元禄十年関所は松平定信公の御預かりとなるや、方々一変して役人の居宅を湖畔中之郷に移す。当時城ノ内より中之郷に移りし者、五味六郎右衛門、赤堀六衛門、右堂甚五衛門、後藤三郎左衛門、川合八郎衛門、安部安左衛門、太田弥太夫、万年三左衛門なり。泰応（承応か）元年関守の内、加藤隆徳（現今の加藤茂三郎の家）は此の地に留まりて農に従事し、与力の服部勘助（鈴木勘次郎氏）神田美衛門（今の鈴木善衛門）も此の地に永住せりと。

菅沼家所蔵の記事左の如し

### 一、今切御関所番頭

服部権太夫様 服部李之助様

右御両人二十四年御勤今切番所延享四年迄百二十八年になる。

服部中様 佐藤甚兵衛様

右御両人之節与力同心等江戸より御越被成候三宅半七郎様 土屋忠次郎様 本田彦八郎様 中根半十郎様 石川又四郎様 松平主馬助様 松平半衛門様

此節志都呂御陣屋篠原村与力同心は中之郷へ御引越被成候元禄十一年迄四十九年篠原御座被成候 とある。

右の記事に關連して新居町史等を参考にすれば関所創設時は幕府直轄地として、初代関所奉行に家康は、この地域の地理に詳しい江馬与右衛門一成を任命した。（現山崎の江馬家）

三代目奉行は天和五年（一六一九）から二名制となり、服部権太夫と服部李之助の兄弟が任命された。役屋敷は湖東の志都呂陣屋である。

五代目奉行は寛永十九年（一六四二）から服部中保俊と服部政次である。服部中保俊は引続き六代目も担当した。この時よりの与力として最初に関所の運営に当たったのは桑原源左衛門、川合八郎左衛門ら六名である。上司の服部奉行の役屋敷が志都呂陣屋のため、陣屋に近い篠原村城ノ内に居住し関所まで舟で通い任務を遂行

した。

七代目奉行は慶安五年（一六五二）より三宅半七郎と佐橋甚兵衛吉次で、三宅は八代目も引き続き担当している。役屋敷は三宅が志都呂陣屋で佐橋は橋本村と分かれた。

十五代奉行のとき元禄十五年（一七〇二）八月関所管理が三河国吉田藩に移された。それまで幕府から直接派遣された関所奉行によって管理されてきたがその職を解かれた。これにより与力同心ら六十余名も、江戸町奉行の組に配属された。しかし何人かは円滑な運営のため残った。

『篠原村誌』によればこの節、加藤隆徳、服部勘助、神田美衛門の三名は帰農して篠原村に永住したとある。

筆者は、この篠原村国方の部落にお住まいの現当主宅を訪問した。加藤氏は大学教授で家を離れて居られない。服部國雄氏、神田善弘氏にお会いすることができ、ご先祖様のお話を伺った。既に『東海展望』に発表されているのでご存知の方もあろうが、三軒ともにご出身が伊賀であること。関所では与力として重要な役目を担当なされたこと。関所へは志都呂近くの舟着場から舟で通ったことなど参考になった。

なお『東海展望』の記事によれば、元禄十五年関所の管理が幕府から吉田藩に移ったとき、服部嘉左衛門、加藤忠太左衛門、神田善右衛門は、吉田藩から適当な人材が欲しいと請われて関所へ来たのが、現在の三家の祖である。

# 往来一札之事

(鈴木七兵衛家文書より一浜松市博物館提供)

往来一札とは往来手形のごとく、江戸時代、庶民が旅をする際、必ず携行した身許証明書です。発行者は主として菩提寺でした。篠原村名の七兵衛が、善光寺参詣から江戸経由で旅をしようとした時のものを取り上げてみます。

## 往来一札之事

一此七兵衛ト申者当午六十一歳罷成候処拙寺丹那二紛無御座候心願有之此度善光寺へ参詣仕江戸両国柳橋大蔵屋利右衛門方迄参候間宿村御関所川々無指支御通可被成候行暮候ハ一宿一飯被仰付可被下候若し病死仕候ハ、不及沙汰二其所之御左方二御取片付可被下候幸便之節御知七被下奉頼上候往来一札仍如件

文政五年 遠州敷知郡浜松之庄篠原村

午八月 禅曹洞宗 万松院

宿村御役人衆中様

概要は、六十一歳の七兵衛は万松院の旦那です。この度善光寺に参詣し、更に江戸両国柳橋大蔵屋利右衛門方まで参ります。つきましては宿村御関所川々を差し支えなく御通し下さい。行き暮れた時には一宿一飯のお取りはからいをお願いします。もし病死したならば、その土

地の作法によって葬り、何かついでの時にお知らせ下さい。

書式は事例から分かるように、氏名、宗門、当寺の檀那であることを示し、次に旅の目的や行き暮れた場合の旅宿の世話を、病死した時にはその所の作法による処置を依頼しつつの節、故郷にお知らせ下されたいと結びます。

## ◇七兵衛の旅についての推察

旅の記録には接していないので、旅に出たかは分かりませんが、多分実現したものと推察します。当時の七兵衛家は名主を世襲しており、高齢の彼は家督を譲っていたであろうし、家業も酒造業他が順調に営まれていたようで、留守をしても心配はなかったと思えるからです。

## ・ 出立の時期と人数

往来一札の年月「文政五年八月」からみて、八月中旬(一八二二年を太陽曆に換算すると、八月十日なら九月二十四日になる)には出立したでしょう。信濃路の峠を越える時の気温も配慮した筈です。

七兵衛は単独でなく、世話の出来る人を(複数)連れていったことと想像します。金銭は充分に用意はしてあった筈で、余裕をもった行程を組んでいたでしょう。

## ・ 旅の経路

当時は旅に関する書も出ていましたから、安

全で宿泊施設も整っている街道を選んだに違いありません。

篠原村から東海道を西へ進み名古屋到着(城下町を見学したかも知れません)。大曾根口から多治見、土岐、瑞浪を経て中山道四十六番目大井宿に達し(名古屋の人々がよく利用した下街道)、ここから中山道を北上。洗馬宿(二十一番目)から善光寺西街道に入り、松本、篠ノ井を経て長野善光寺に着いたことでしょう。

参詣後は北国街道(長野、篠ノ井、上田、海野、小諸、追分)を利用し、追分から中山道に入り、江戸を目指した筈です。

## ・ 江戸両国柳橋大蔵屋利右衛門

大蔵屋利右衛門とは深い繋がりがあつたものと想像します。「江戸買物独案内(文政七年)」には、利右衛門名の商人は複数いますが、屋号と一致する該当者はありません。柳橋に近く利右衛門名で下り酒問屋を営んでいた人物だったかも知れません。利右衛門方で世話になりながら江戸の名所、芝居見物もしたことでしょう。

## 終わりに

この往来一札により、当時の旅のことが窺えると思います、七兵衛の旅を想像してみました。経費も推算できますが、余裕をもった使い方をし、無事に旅を終えたものと推察をしました。

# 篠原地区のこま犬さん

浜風会会員 山 中道弘

仁王さんほどの強烈な印象はなく、地味でなんとなく見過ごされてしまいがちなこま犬さんにスポットを当ててみました。それぞれに特色があり、面白く興味がわくかと思えます。

## 1. 狛犬の起源

日本での原型は京都御所紫宸殿の一对で平安時代まで遡ります。時代が下がり宮中から屋外に飛び出し、神社拝殿前などに鎮座するようになったのです。

## 2. 狛犬の設置方向

「神聖な場所を守護するため」のもので、一般的に神社に向かって右側に「阿形像」、左側に「吽形像」の一对が置かれ、両者向かい合っています。

## 3. なぜ「阿吽」の表情をしているか

阿吽の表情については、「あ」は始韻、「ん」は終韻で人の一生を表しているとのこと。

## 4. 篠原地区(岡崎型) 狛犬の特徴

岡崎型狛犬の基本的な特徴を申し上げますと、材質は花崗岩、阿形像と吽形像は明確に分かれ、双方獅子型で雌雄ははっきりせず、顔はほぼ四角です。耳は横に伸び眉は各二個の巻き毛からなり、髭は巻き毛と直毛の束とが、明確に分かれ、一般的には渦巻きが二十個。直毛が十本の形式が多いようです。吽形像は犬歯が二本(初期の頃は四本)のみで、一方の阿形像は犬歯が二本と他は臼歯という雑食性のもが多いようです。吽形像の顎の下には阿形像にはみられない顎髭一本ついているものが多く、尻尾を後方から見ますと上に伸びた炎形の部分と左右に分かれる部分との三方向に伸びてい

ます。

## 5. 篠原地区のこま犬(神使)

### ① 八阪神社

拝殿前左右に小型の狛犬が座し、像は拝殿新築記念として昭和四十三年頃、寄進されたようです。角座上で両像とも同じ顔をして雌雄は不明、いずれも体に対し顔が大きいです。阿形像は臼歯が十二本、犬歯が四本、一方の吽形像は犬歯が二本見られます。双方とも髭に十六の渦巻きがあり、尻尾は上に伸びた炎の直毛と左右に分かれた渦状の三つに分かれています。

### ② 西神明神社

狛犬は拝殿に向かって右側に左足を玉乗せの阿形像が、同左側には左足で獅子を抱いた吽形像がそれぞれ角座上に座し、像は岡崎型で阿形像には臼歯十四本、犬歯四本が、吽形像の方は犬歯が二本で、尻尾は巻き毛と直毛とに分かれ返し波のようなきれいな形をしています。台座後面には大正十一年四月十五日と刻あり。

### ③ 愛宕神社

拝殿前左右に岡崎型のこま犬が盤座上に座し、顔は左右ともほぼ同じで雌雄は不明。耳は横に伸び、髭は巻き毛と直毛とに分かれ、尻尾については直毛と巻き毛とに三分されており、阿形像には臼歯が十四本、犬歯が四本、

吽形像は犬歯が二本ですが、阿形像にはない左右に分かれた顎髭があります。台座後面に昭和七年九月建立と刻あり。

### ④ 稲荷神社

拝殿前左右に稲荷神社の神使である狐像が盤座上で遠くを見つめ温かい表情で迎えてくれます。台座裏面に昭和七年九月建立と刻あり。

### ⑤ 八幡宮

狛犬は拝殿前左右盤座上に座し、雌雄は不明で、顔は四角で体の割には大きく、耳は左右横に伸び、髭は巻き毛と直毛の束がはつきりとしています。向かって右側の阿形像は左前足を手まり上に乗せ、口中を見ますと臼歯が十一本、犬歯が四本あり、左側の吽形像は座した獅子を左前足で抱き、犬歯が二本顎に左右に分かれた顎髭がみられます。台座後面に昭和十七年十月寄進と刻あり。

### ⑥ 春日神社

拝殿前

に春日大

明神の神使である雌雄の鹿のブロンズ像が出迎えてくれます。向かって右側の牡鹿は左右斜め方向に角を広げた堂々の姿を、左側の雌鹿は首を下方に向けて優しい目をしています。台座に昭和四十六年再建と刻あり。



愛宕神社のこま犬さん

浜風会会報第18号  
 浜松市篠原公民館同好会「浜風会」  
 (篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)  
 編集委員 委員長 鈴木清  
 鈴木義雄 鈴木幹久 中山清  
 鈴木忠 山下勝彦  
 発行責任者 山下勝彦  
 発行平成23年1月1日  
 連絡先: 篠原公民館気付